

短期大学における被服構成および 実習に関する研究 (第2報)

本学学生の実態調査

荻野千鶴子・古川智恵子
加藤恵子・後藤喜恵

Studies Dress on the Lesson and Practice of
Composition in Junior College (Part 2)

Investigations on the Real Conditions of
Students in Nagoya Women's Junior College

by

C. OGINO, C. FURUKAWA
K. KATO and Y. GOTO

緒 言

短期大学の被服構成および実習の指導において、高等学校履習課程の違いによる知識、技能差、個人差が入学当初一部のものについて認められる。しかしこのような差違が、授業の進行と共に卒業時まで、どのように移行するか私共は確実に把握してないのでこれらの点について学生の意識調査を交えて検討を行ない、高等学校履習課程別に実態を把握して、今後の能率的な被服教材設定の基礎資料にしたいと考え調査を試みたので報告する。

調査方法

1. 調査対象および調査時期

本学短期大学部学生の「被服構成および実習」の履習単位のことなる A, B, C の 3 グループすなわち、A グループ洋裁 8 単位、和裁 4 単位、B グループ洋裁 (和裁を含む) 4 単位、C グループ洋裁 4 単位、和裁 2 単位の履習別グループを対象とした。

調査時期は表 1 のようであるが、本研究開始時期の関係上第 1 回の調査が 7 月実施のやむなきになったが、そ

のため 4 月から 7 月まですでに授業が進行しており入学当初の知識、技能把握の確実性に乏しいためこれら

		1回 44年7月初旬				2回 45年3月中旬				
年度	課程	グループ		A		B		C		計
		普通	家政	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
44	普通			51人	86.4%	43人	76.8%	43人	84.3%	137人
	家政			8	13.6	13	23.2	8	15.7	

表1 調査月日及び調査対象

をより正確に把握するために、45年度は4月中旬の入学直後に調査を行なった。

2. 調査内容

表2に示すように

1. 被服構成の履習教材	2. 意識調査	3. 実技テスト (ブラウス, スカート, ゆかた)	4. ペーパーテスト (ブラウス, スカート, ゆかた)
<ul style="list-style-type: none"> ○中学校, 高等学校における履習教材 ○本学における履習教材 	<ul style="list-style-type: none"> ○期待度 ○必要度 ○好嫌度 	<ol style="list-style-type: none"> 1. まつり方 2. 千鳥ぐけ 3. なみぬい 4. バイヤス付け 5. 眠り穴ボタン付け 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 洋裁の基礎テスト 2. 感覚 3. 和裁 4. 和洋の基礎縫及び材料, アイロンの温度 5. ミシンの取扱いについて

実験場所=本学被服実習室—ミシン各1台 実施時間=実技・ペーパーテスト各50分

表2 調査内容

- 1) 被服構成の履習教材は, 中学校, 高等学校における履習教材の調査および本学における教材, 講義に対する希望のアンケート調査を行なった。
- 2) 被服構成に対する学生の意識調査は, 期待度, 必要度, 好嫌度の3項目にわけ各項目を5段階表示にして, アンケート調査を行なった。
- 3) 実技テストはブラウス, スカート, ゆかたについての基礎的技術をもとにしたテストにした。テスト項目は図1のごとく

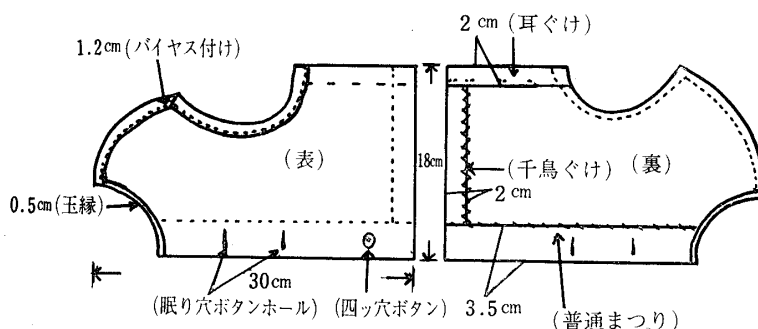


図1 実技テスト出来上り図

- ①……まつり
- ②……千鳥ぐけ
- ③……バイヤスつけ
- ④……眠り穴およびボタンつけ
- ⑤……なみぬい (別布)

とし, まつりは普通まつり, なみぬいは並巾さらしの半巾を二つ折りにして, 長さを30cmとして, 1分間に何センチ縫ったかを測定実験した。眠り穴, ボタンつけは二つ折り箇所, 径1.5cm 4つ穴ボタンをつけ, さらにこの釦に適応する眠り穴を30番カタン糸にてかがった。バイヤスつけは半円外廻り, および半円内廻りのカーブづけとし他を角始末とした。

4) ペーパーテストはブラウス, スカート, ゆかたについて基礎的問題を5分類し, 様式は図2のごとくである。

評価方法は, ペーパーテスト・実技テストとも評価観点を研究者の間で一定にし, それに対する配点を決めて4人の研究者が個々に採点し, それらの平均値をとった。実験場所は本学被服実習室とし, 実施時間は両者とも各50分とした。

実験結果および考察

1. 履習教材調査

1) 中学校，高等学校における履習教材調査

本調査に当り入学以前にどれだけ，中学校，高等学校において授業中に製作しているかそれぞれ作品を調べ，これを本学教材設定の一助にしたいと考えた結果は，図3のごとく中学

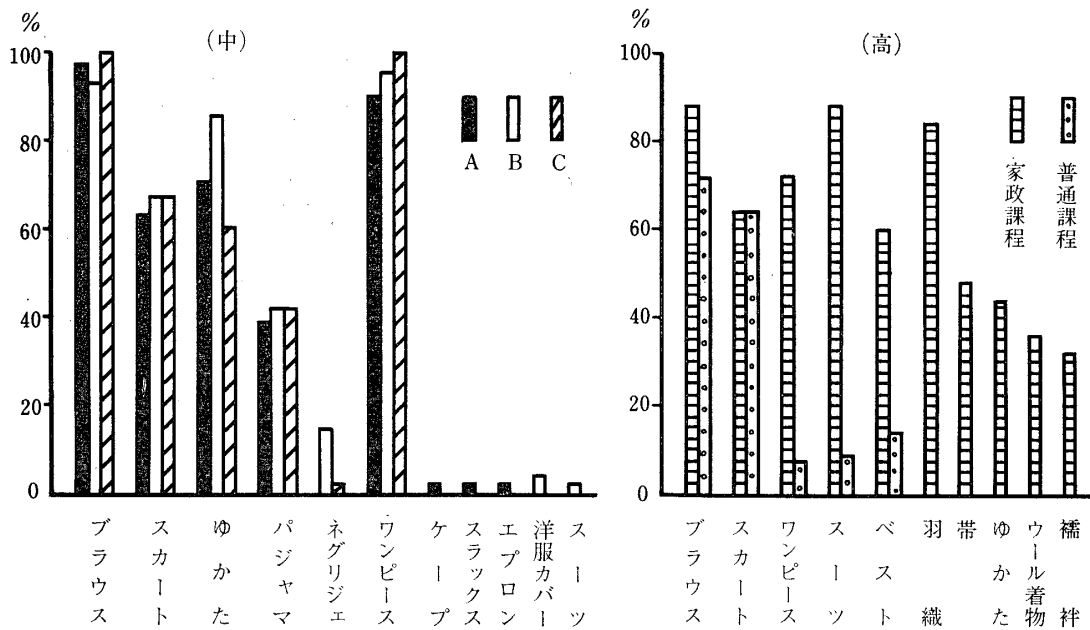


図3 中学・高校における履習教材

校ではブラウス，ワンピースが3グループとも90%以上をしめ，ゆかた，パジャマ，ネグリジェは休養着として何れか1枚を製作するためその差が著しかった。またスカートにおいては平均65%をしめているのは活動着においてブラウスのみ製作している学校があるための結果と考えられる。これらのものは各学校ともそれぞれ文部省の指導要領にそったカリキュラムで行なわれていることがわかった。Bグループでスーツなど中学生の作品として困難だと考えられるものを手がけている学生も一部みられた。つぎに高等学校における出身課程別調査を行なった結果3年間の履習教材には，普通課程出身者と家政課程出身者には大きな違いが出ている。すなわち普通課程においてはブラウス，スカートが60%以上，次いでベスト14%である。家政課程においてはブラウス，スーツ，羽織が80%以上，ワンピース，ベストが60%以上，次いで帯の順になっている。これら課程別に生徒1人当りの製作点数を調べたところ，普通課程においては，洋裁は1.7枚，和裁は0.13枚に対し，家政課程においては洋裁は5.2枚，和裁は2.6枚を製作している結果が得られ，製作品に対しては普通課程と家政課程の間には顕著な差がみられた。

2) 本学での履習教材

表3のごとく本学では2年間の履習教材をグループ別に考慮して洋裁，和裁それぞれを立案した。いずれも2年間でAグループは洋裁8単位週6時間，和裁は6単位週4時間，Bグループは洋裁，和裁で4単位週3時間，Cグループは洋裁4単位3時間，和裁は2年時のみ2単位3時間である。

以上のように3グループそれぞれ実習細目，部分縫に特色を出した。

1時間=50分

学年	グループ	単 位		週時間		洋 裁			和 裁				
		洋	和	洋	和	実習細目	時間	部 分 縫	時間	実習細目	時間	部 分 縫	時間
1	A	4	3	6	4	スカート	10.6	基 礎 縫	14	大裁女物単長	30	衿先……狭	7
						ブラウス	38	裾始末脇明き	12	大裁男物単長	25	……広	
2	A	4	3	6	4	ワンピース	32	前立明き	4	大裁女物衿長	44	……男	6
								カラー, 袖口 はりつけ ポケット	12.6	名古屋帯	14	袷	
2	A	4	3	6	4	ワンピース	38	ポケット各種	18	大・女・衿羽織	29	羽織前下り	12
						オーバー コート	45	ベ ン ツ	2	長 襦 袢	23	及び衿つけ	
						自由作品	24	裏始末(半, 総)	30	小 単 長	20	コート堅衿 小衿	
										コ ー ト	30	ポケット	
1	B	2	3	3	3	スカート	12	脇 明 き	8	大・女・単長	30	衿 先	2
						パジャマ	10	裾 始 末	6			運針毎時 10分ずつ	
2	B	2	3	3	3	ブラウス	38	カ ラ ー	8				
						ワンピース	32	袖 口	6				
								前立明き	4				
1	C	2	3	3	3	スカート	10.6	基 礎 縫 い	14				
						ブラウス	38	裾, カラー, 袖口	18				
2	C	2	2	3	3	ワンピース	32	前立明き	3	大裁女物単長	30	衿先…男女	3
						ベスト スーツ	42	ベ ン ツ	3	大裁男物単長	25	……	
										大裁女物単長	20		
										名古屋帯	12		

注. 和裁は講義時間を含む

表3 本学における履習教材表(44年度)

3) 7月までの履習教材

表3の立案によりA・B・Cグループともそれぞれ開講していたが、本調査を7月に実施したため、4月より7月までの履習教材の進度内容を表4に表わした。A・B・Cグループとも履習時間、講義内容、実習細目、部分縫など異なり、Aは洋裁65時間、和裁は45時間、Bは和裁のみ33時間、Cは洋裁のみ33時間を履習し、実習細目ではAの洋裁はスカートを、和裁は大裁女物単衣長着を完成し、大裁男物単衣長着の途中までしている。Bは大裁女物単衣長着を完成し、Cはスカートの途中までしていた。部分縫ではA・Cグループとも洋裁において前期授業時数の約半分の時間を費やしていた。

4) 教材に対する意見

洋裁(図4)について特に講義の中に希望する項目がある場合のみ、学生に自由形式にて記入させた結果、洋裁は「既制服の買い方」についてA・Cグループは40%と最も高い希望

		講義その他	時間	実習細目	時間	部分縫	時間
A	洋裁	<ul style="list-style-type: none"> ○洋裁に対する心得 用具の使い方 標準寸法とその計り方 婦人原型, 袖の原型 ○生地を選択 ○各種カラー, スカートのブラウスの製図 ○仮縫及び補正の仕方 	4 1 6 4	スカート	20	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎縫 ○裾始末4種 ○スカート脇明き ベルトつけ ○カフスつき袖口 ○ヒップボーン ウエスト始末 	14 4 8 2 2
	和裁	<ul style="list-style-type: none"> ○用具その他 基礎技術について 	2	大裁女物単衣長 大裁男物単衣長	28 4	狭衿, 衿先	2
B	和裁	<ul style="list-style-type: none"> ○用具その他 ○基礎技術について 材料, 裁ち方, 見積り方 ○着装の仕方 	1 2 1	大裁女物単衣長	26	衿先 運針毎時 10分ずつ	2 2
	洋裁	<ul style="list-style-type: none"> ○洋裁に対する心得 用具の使い方 標準寸法とその計り方 ○各種スカート製図 ○仮縫補正の仕方 	3 3 2	スカート補正 の仕方まで	6	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎縫 ○裾の始末2種 ○スカート脇明き ベルトつけ 	9 3 6

表4 7月までの履習教材表

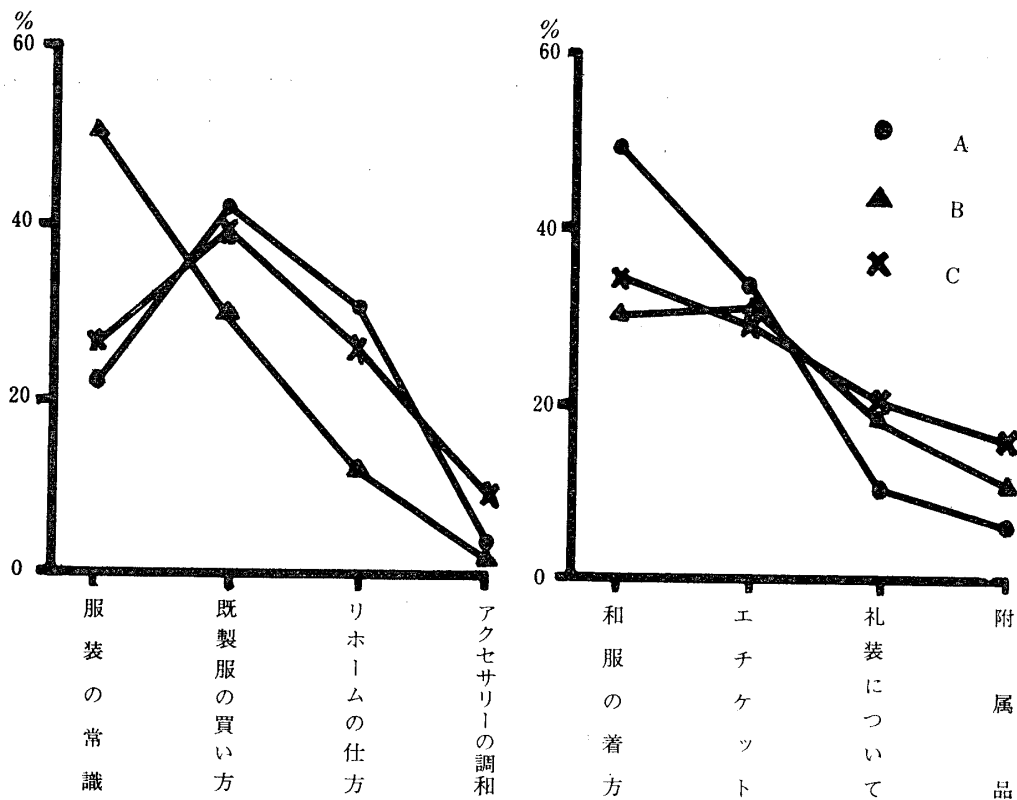


図4 講義希望のもの

がみられ、次いで「リホームの仕方」「服装の常識」が第2位にみられる。Bグループでは前者に異なり、「服装の常識」が50%とクラスの半分が希望しており、次いで「既製服の買い方」「リホームの仕方」と表われている。

和裁においては、図4のごとく、A・B・Cグループともほとんど同じ傾向がみられる。すなわち「和服の着方」はAグループ50%、B・Cグループは30~35%で最も希望が高く、次いで「和装のエチケット」となっている。近年和服が静かなブームで特に女性の間を広がりつつある傾向がここにも現われている。

5) 実習に対する細目希望

本学の履習教材の各項目（表3参照）に対する意見や希望を調査した結果は、表5のようである。すなわちA・B・Cグループとも低率ながらスーツ、スラックス、パジャマを希望していた。スーツはAグループのみ教材として取扱っているが、ここに示した数は是非と望んで記入したものと思われる。しかしB・Cグループでツーピースを希望していても、これは現在の履習状況では無理があるので、今後時間計測を行ない可能な場合は履習細目の中に加えてゆきたいと思っている。

細目	グループ		
	A	B	C
スー ツ	18.1	9.1	4.0
ジャンパースカート	6.4		2.0
スラックス	12.8	4.9	4.1
ツーピース		14.0	16.3
キュロット	1.1		
パジャマ	1.1	1.7	2.0
子供服	6.4		6.1

表5 実習に対する細目希望 (%)

2. 意識調査

図5に示すように、被服構成に対する学生の関心度を、期待度、必要度、好嫌度の三項目に分け、これらをそれぞれ

- 1は非常に期待する（必要，好嫌）
- 2はかなり期待する（同 上）
- 3はふつう（同 上）
- 4は余り期待しない（同 上）
- 5は全然期待しない（同 上）

の5段階表示にて記入させた。（以下1~5の記号で略す）

- 1) 期待度ではAグループは2と答えたものが全体の47%で最も多く、1の3.5%と合すると50%で約半数を占め、グループの特徴がよく現われているものと考えられる。また普通

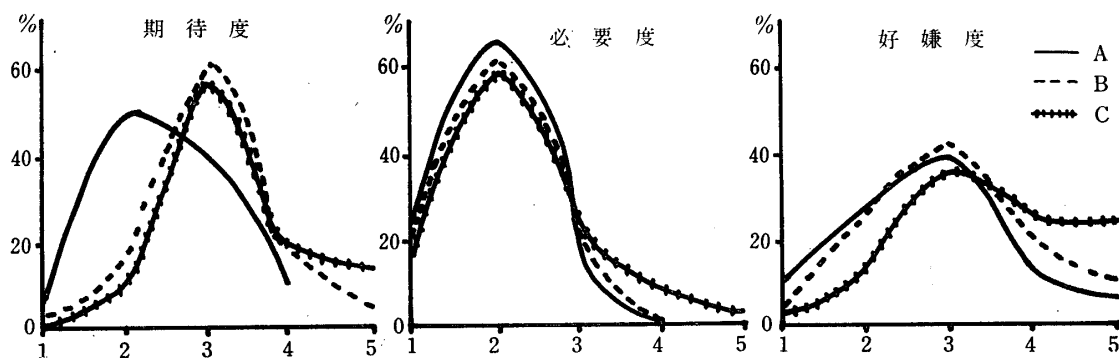


図5 学生の被服構成に対する関心度

である3が38%をしめ、4・5のものはほとんどみられなかった。B・Cグループにおいては3の者が60%で期待度を示さない者が最も多い。期待を示す2は、わずか10~18%である。これに反し4・5の者が20~30%もみられた。これはB、Cグループにおいては被服関係が主目的で入学していないためと思われる。

2) 必要度では各グループの特徴はあまりなく、どのグループにおいても、2の者が60%以上、1の者で15~20%で、1・2を合せて80%以上となり、被服構成の必要性を高く認めていることが把握できる。しかしCグループには4・5の者が約10%とわずかながらみとめられた。

3) 好嫌度では1・2すなわち「好き」がAグループが最も多く、約35%をしめ、ついでBグループ29%となっている。また3すなわち「好きでも嫌いでもない」のが何れのグループをみても最も高く、35~40%みられる。また4・5はAグループ19%、Bグループ29%、Cグループ49%と被服構成の嫌いな者が目立つことは、既製服の発展がめざましく、経済的にも恵まれ、簡単に入手できることなどから製作に対する愛着が薄らいでいる傾向があるのではないかと考えられる。

3. 実技テスト

1) 図6に示すように、7月実施の実技テストの総合得点の平均は、A・B・Cの各グループとも、家政課程出身者が上位をしめた。表6にしめたように統計的に考察するためにT検定による有意差検定を行なった結果、A・B・Cグループの家政課程と普通課程の間ではAグループは5%、Bグループは1%、Cグループは5%の危険率でそれぞれ有意差がみとめられ、家政課程が普通課程にくらべすぐれていることが把握できた。つぎに普通課程間の各グループの間においては、A-Bにおいて1%、A-Cにおいても1%の有意差がみとめられた。C-Bにおいては全く有意差がみとめられなかった。これはAグループがB・Cグループよりも実技において、優位であるといえる。以上の結果4月より7月までにAグループは授業時間数も多く技能

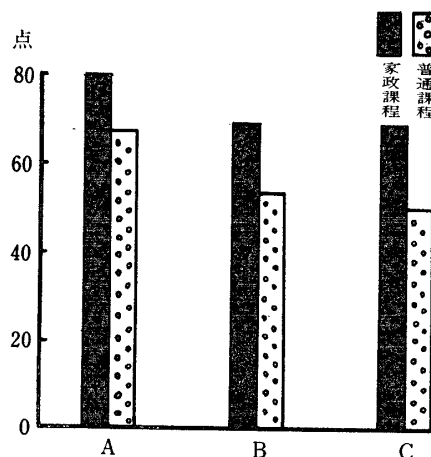


図6 実技テスト平均値

これはAグループがB・Cグループよりも実技において、優位であるといえる。以上の結果4月より7月までにAグループは授業時間数も多く技能

		$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	n_1	n_2	u	t_0	検定	t(0.05)	t(0.01)
普通課程	A-B	14.51	40	43	14.43	4.58	**	1.99	
	A-C	11.70	40	43	19.43	2.74	**	1.99	
	C-B	2.81	43	43	19.11	0.68		1.99	
家政課程	A-B	6.85	9	13	25.13	0.63		2.09	
	A-C	4.67	9	8	29.64	0.29		2.16	
	C-B	2.18	8	13	27.73	0.16		2.11	
A	家政-普通	17.37	9	40	17.58	2.13	*	2.01	
B	家政-普通	15.03	13	43	16.65	2.82	**	2.01	2.68
C	家政-普通	14.40	8	43	24.17	2.04	*	2.01	

表6 本学における実技テスト 7/10実施コース別、課程別の有意差検定

が上達したものと考察されるのである。家政課程においては、各グループ間に全く有意差がみとめられなかった。これは前述のように高校家政課程において相当数の教材を履習しているためと考えられる。

2) 穴かがりの上達度

実技テストの中から穴かがりについて、年度末の3月に2回目を実施し7月時の1回目と1年後の2回目の上達の度合いを比較してみた。穴かがりを取り上げたのは、実験条件を一定にやすく、短時間にできること、技術差が明確に判断できること、採点が的確にできるためなどの条件からである。まず図7により、グループ別、課程別に平均値間の差についてみると、家政課程出身者においては、A・B・Cグループとも1回目と2回目にあまり差が

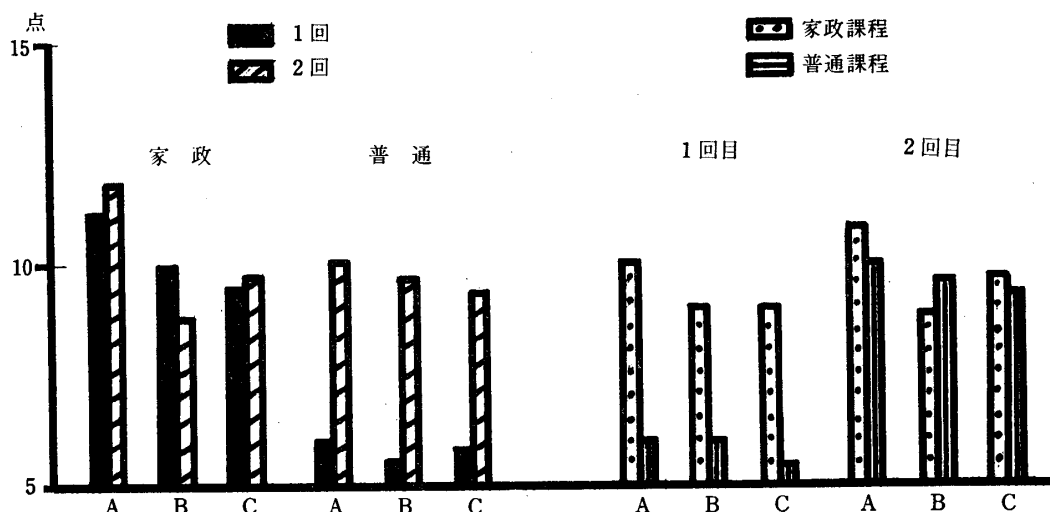


図7 穴かがり1回目と2回目の上達度

なく、Aグループのみわずかな伸びがみとめられる。普通課程出身者においては、1回目の点がかかなり低かったのに対して、2回目には、どのグループも平均してかなりの上達の度合いをしめしている。つぎに家政課程と普通課程を比較してみると、A・B・Cグループとも1回目は、家政課程が高くなっている。これは

			n		\bar{x}	to	検定	t(0.05)	t(0.01)
			家	普					
家政課程	A	2回-1回	8		0.66	1.32		2.36	—
	B	〃	11		-0.73	0.69		2.23	—
	C	〃	6		0.67	2.28		2.57	—
普通課程	A	〃		8	4	4.4	**	2.36	3.5
	B	〃		11	4	3.35	**	2.23	3.17
	C	〃		6	3.7	3.62	*	2.57	4.03
1回目	A	家政-普通	8	8	4	2.16	*	2.14	—
	B	〃	11	11	4.2	2.51	*	2.08	—
	C	〃	6	6	3.84	1.50		—	—
2回目	A	〃	8	8	0.68	0.27		—	—
	B	〃	11	11	-0.8	0.45		—	—
	C	〃	6	6	0.37	0.14		—	—

表7 44年度穴かがり1回目と2回目の上達度
コース別、課程別の有意差検定

高校における履習教材の有無によるものと考えられる。1年後の2回目を見ると、普通課程、家政課程ともに上達しているが、1回目の結果と異なり普通課程の伸びが著しいことが把握できる。これらを表7に示すように有意差検定を行なった。家政課程の1回目と2回目の間においては、A・B・Cグループとも検定結果は有意差は全くみとめられなかった。つぎに普通課程のA・B・Cグループの1回目と2回目の間においてA・Bグループはそれぞれ1%、Cグループは5%の危険率で有意差がみとめられた。また一回目の家政課程、普通課程間において、A・Bグループはそれぞれ5%の水準で有意差がみとめられた。Cグループにおいては有意差はみとめられなかった。次に2回目の家政課程、普通課程間においては各グループとも有意差は全くみとめられなかった。以上の結果から普通課程出身者の入学後の技能の伸びは認められるが、家政課程出身者の技能の伸びはみとめられなかった。これらの結果は短大における被服の指導法にも関連があるのではないだろうか。

4. ペーパーテスト

1) 44年度7月におけるペーパーテストについて

表8は被験者165名のテスト結果をグループ別、課程別に分類別平均値及び総合点をしめたものである。これによればA・B・Cグループとも、普通課程出身者より家政課程出身者が、分類別平均値及びその総計において数値的に高くみられた。中でも平均値間の差の顕著に多いものと少ないものが各グループ共通にみられる。開きの大きいものは、和裁のテストで、開きの少ないものはミシンと感覚の基礎テストである。表9はこれを統計的に検討するために、グループ別、課程別に平均値間の差について有意差検定を行なったものである。その結果統計において家政課程出身者と普通課程出身者の間で危険率5%で有意差がみとめられたのは、B・Cグループであり、Aグループは7月の時点ですでに有意差はみられなかった。これらの内容を分類別にみると、ミシンと感覚・和洋の被服構成の基礎テストでは、3グループとも家政課程出身者と普通課程出身者の間に有意差はみとめられず、和裁の基礎A・Bグループは5%、Cグループは1%の危険率で有意差がみとめられた。また普通課程間の各グループの間においては、AとB、AとCの間に1%の危険率で有意差がみられ、BとCグループの間においては、有意差はみられなかった。これは7月調査のテストであるので、4月から7月まではすでに授業が進行しており、Aグループは他の2グループに比して被服構成実習の授業時数も多く、学生の被服工作に対する関心度も最も高いために、知識の吸収度もB・Cグループに比して大きかったものと考察される。家政課程間の各グループの間においては、有意差は全くみられなかった。

2) 9月と3月における履習別テストについて

図8はさらに44年度の9月と年度末の3月に課程別の知識の移行をみるため、各グループ

テスト グループ	洋 裁		感 覚		被 服 構 成		和 裁		ミ シ ン		総 計	
	家 政	普 通	家 政	普 通	家 政	普 通	家 政	普 通	家 政	普 通	家 政	普 通
A	10.42	9.53	4.00	3.81	18.58	14.95	32.58	27.40	17.66	18.70	83.25	74.40
B	11.57	7.20	5.43	3.00	17.43	10.73	30.29	24.51	16.29	12.14	78.61	62.00
C	9.83	9.52	5.33	5.19	15.67	13.47	20.67	9.19	15.83	15.57	67.33	52.76

表8 44年度のペーパーテスト結果 (\bar{x})

項目	資料数		洋裁の基礎			感覚		被服構成		和裁		ミシン		総計							
	n ₁	n ₂	$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定 (0.05)	t	$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定 (0.01)	$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定	$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定						
A 家一普	8	51	0.89	1.11		2.0	0.19	0.25		3.68	1.98		5.12	2.05	*	-1.04	0.58		8.85	1.53	
B 家一普	12	43	5.31	2.01	*	2.0	1.22	1.24		-0.8	0.39		5.78	2.07	*	0.65	0.34		16.61	2.12	*
C 家一普	8	43	0.31	0.20		2.01	0.14	0.24		2.20	0.95		11.48	4.14	**	0.26	0.13		14.57	2.38	*
普通	51	43	-1.26	2.42	*	1.98	-0.21	0.36		-3.28	3.07	**	1.76	1.17		3.06	3.47	**	17.42	3.12	**
	51	43	0.01	0.02		1.99	-1.38	3.62	**	1.48	1.36		18.21	13.3	**	3.13	3.74	**	21.64	8.07	**
B-C	43	43	1.27	2.36	*	1.98	-0.98	2.47	*	4.76	4.66	**	16.45	12.46	**	0.7	0.8		4.22	0.79	
家	8	12	1.15	1.72		2.10	-1.43	2.97	**	1.15	0.89		2.29	1.12		1.63	1.48		1.5	0.21	
	8	8	0.59	0.35		2.12	-1.33	0.96		2.91	0.76		11.91	2.22	*	1.83	0.53		15.92	1.12	
政	12	8	1.74	0.67		2.18	0.34	0.34		1.76	0.41		9.62	1.36		0.46	0.11		14.42	0.83	

表9 44年度7月調査ペーパーテストのグループ別、高校課程別有意差検定

の履習別のペーパーテストを実施した結果を図示したものである。これによると9月においては、A・B・Cグループともに、家政課程のテスト平均値が普通課程の平均値より高くみられるが、3月時の結果では、普通課程の平均値が家政課程の平均値より高く、全く逆の傾向がみられた。しかし更に統計的に考察するために、課程別のT検定による有意差検定を行なった。結果を表10に示す。これにより次のことが明らかになった。44年9月における結果では、A・B・Cグループのテスト平均

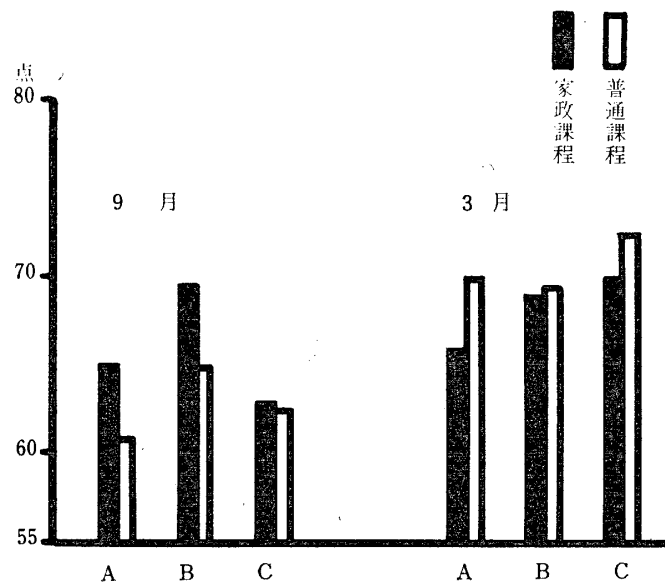


図8 履習別テスト平均値

値は、3グループとも家政課程が上位であるが検定結果は、有意差はみとめられなかった。また45年3月における結果では、普通課程の平均値が3グループとも上位であるが、検定結果は有意差は全くみとめられなかった。

年月日		44年9月中旬				45年3月初旬		
		$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定	t(0.05)	$\bar{x}_1 - \bar{x}_2$	to	検定
A	家 - 普	2.05	1.43		2.0	-2.31	1.52	
B	家 - 普	3.39	0.49		2.0	-1.54	0.14	
C	家 - 普	1.24	0.13		2.0	-2.35	0.24	

表10 44年度ペーパーテスト結果
課程別、有意差検定

要 約

高校履習課程別による、被服構成および実習における履習教材や本学における知識技能差の調査結果をまとめると、

1. 中学における履習教材では1年活動着では、ブラウス、3年外出着として、ワンピースは90%以上の高率をしめし、2年休養着はパジャマよりゆかたを履習した学校が多かった。高等学校においては、普通課程ではブラウス、スカートの履習教材が多く、家政課程における洋裁はブラウス、スカート、スーツ、ワンピース、ベストが多く和裁においては羽織、帯、ゆかた等が多くみられた。本学短期大学の履習教材においては3グループともブラウス、スカート、ワンピース、ゆかたを実習細目に取り入れている。また全国短大の集計も第一報に報告したように、ブラウス、スカートは100%を越え、ワンピースは62%の履習となっている。以上の点からみてブラウス、スカート或はやや下廻るがワンピースは中学校、高等学校、短大といずれの学校においても同じ教材を取扱っているが、果してたての関連はどうなって

いるだろうか、生徒学生の興味の上からもこれら重複教材の取扱い方について今後研究する必要があると思われる。また一方高等学校の履習課程の違いによる入学当初の能力の差をそのままにして、普通課程、家政課程の出身者を同一クラスにおいて授業を進める場合の指導法の問題点などが今後の取り組むべき課題と考えられる。

2. 学生の関心度では、3グループを通じAグループが最も意識層が高く、次いでBグループで、Cグループは各段階のばらつきがみられて、意識として低くそれぞれの目的とするグループの意識の傾向がすなおに出ていると考えられた。
3. 技能テストを統計的にみると、入学当初は家政課程出身者が3グループとも平均値が上位であるが、穴ががりの上達度においては普通課程の入学後の技能の伸びが、各グループとも顕著にみとめられたが、家政課程出身者は入学後の伸びがそれほどみられなかった。このことは45年度の巾広い技能テスト調査をまたなければ正確な傾向は把握できない。
4. 知識テスト結果でも入学時はA・B・Cグループとも、家政課程出身者の方が上位であることがみとめられたが、一年後のテスト結果では3グループとも統計的にみると普通課程と家政課程の間に差はなくなり、平均値ではむしろ普通課程が高く出現した。

44年度の以上の結果から入学当初は、明らかに高校の課程別による能力差が認められたが引続き45年度も更に一層能力差とその移行状態を明確にするための調査を続行中であるが、現在本学では、普通課程、家政課程出身者を区別することなく、むしろクラスの殆んどを占める普通課程に規準を置いているために、家政出身者には当初足踏状態のものもあるのではないかと考えられる。これを解決するための指導方法へ今後は研究を深めていきたいと思うのである。本研究にあたり、実験に御協力下さった本学家政科学生に厚く感謝する。

参 考 文 献

- 1) 柳沢澄子, 原田藤枝著: (1969) Dress pattern の基礎と応用
- 2) 細野 久: (1968) マテリアル, デザイン裁縫
- 3) 文 部 省: (1969) 中学校, 学習指導要領